

高山の文化を高めた人々

No. 68

絵付師 吉川菊麿

田中 彰



好きなベレー帽をかぶっての絵付作業 上岡本芳国舎

吉川菊麿は本名菊右衛門といい、菊磨は絵付師としての号、明治四十四年高山町川西で吉川家二男として生まれた。芳国舎洪草製陶所の絵付師として著名であったが、その生い立ちを知るため姪の坂谷宣子さんを訪れた。宣子さんは吉川家長男、達三の娘で、菊磨は達三の弟、叔父さ

んにあたる。菊磨のことをよく知る人で、小さい頃からずいぶん可愛がられたと聞き、詳しく話を伺った。何しろ絵が好きで、叔父さんと、宣子さんが小さい頃、羽子板の裏に絵を描いてくれてうれしかったという。性格はおおらかで細かいことにこだわらず、人の悪口を言わなかった。一心に絵を好きで描きたいという強い想いを持ち、気ままに暮らしていた。絵は油絵、版画、日本画、水墨画など、何でもこなした。版画は若い頃で、晩年は水墨画をよく描いていたと宣子さんは振り返る。

絵を描きたいと思うようになったきっかけは何であったのか。菊磨の家の近くに画家の樺文峰（あきふみ）がいて、そこに出入りして、接触していたように、絵についていろいろ教えてもらったりし

い。



静物の版画 坂谷家蔵

い。

芳国舎には大正十五年から昭和五十六年までの五十六年勤め、陶画の傍ら絵を学んで陶磁器に表現した。入社した当時、小野華処（福島出身）、中垣芳泉がいて師事、その後絵付師は吉川菊磨、松山文雄（上二之町）、船越山治（初田町）、美素文夫（上岡本）が担っている。守洞春も上岡本の芳国舎をよく訪れ、菊磨たちとの親交を深めていた。

菊磨の絵付けは置目（絵の輪郭下絵）が無くても絵を描けたといい、その才能が知られ、丁寧な仕事をする職人として芳国舎では重要な役割を果たした。

退職してからは気ままに絵を描き、人生で一番楽しい時期を過ごした。晩年、菊磨は好きな絵と共に生きてよかったと言っていたが、病を得て日赤病院に入院し、三カ月程

で亡くなってしまった。絵をこよなく愛し、小さな器の中に菊磨の世界を描き続けた彼の作品は、芳国舎の陶磁器を愛する人たちに彼の想いを伝え続けている。

—略歴—

明治四十四年十一月一日～平成三年十二月二十一日

日版会の創立会員。東光会会員。日展版画部門で入選五回。昭和十九、二十年、高山に疎開していた東京美術学校工芸技術講習所の生徒に実技指導した。伝統的工芸品産業振興協会会長表彰（昭和五十一）。卓越技能者労働大臣表彰（昭和五十七）。勲六等瑞宝章（昭和五十九）。趣味は魚釣り、タバコ。コーヒーが大好きで毎日のように喫茶店に通っていた。



七賢人の陶磁器 坂谷家蔵